


播州赤穂の塩製造技術は、姫路藩の的形などから1600年代に伝えられた

塩田作りは古式塩田技術と防潮堤建造技術とが結びつき、播州赤穂で花開いた。姫路藩では小規模経営者の集まりであったものが、播州赤穂においては大規模事業として運営できたことが、赤穂塩業の大きな発展の原動力になった。江戸時代の昔にも、資本の原理が働いていたということである。

神戸新聞 2020.4.25



先祖が的形から赤穂へ移住し、最新の製塩法を伝えたとする「的形弘さん」  
赤穂市御崎

### 先祖が赤穂へ塩作り伝える 的形弘さん語る

江戸前期、最先端の製塩法に精通した技術者が、姫路藩内の的形村や荒井村（現高砂市）などから数多く赤穂へと移住し、赤穂を一大産地に押し上げる塩田開発を担った。

子孫の一人が、赤穂市御崎に住む的形弘さん（77）。祖先は赤穂に定住した後、ルーツにちなみ「的形」の姓を名乗ったという。

赤穂が本格的な塩の産地となったのは1645年、池田家に代わり浅野家が藩主となってから。千種川東岸を干拓して近世的な入浜塩田を開発した。

「赤穂塩業史」（編著者・広山義道氏）によると、姫路藩内からの転入は46年に開始。48年、的形村から移住したのが弘さんの祖先一市兵衛だった。

弘さん宅には昭和初期に作られた家系史料が残る。市兵衛は弘さんから14代前の当主。的形を名乗ったのは明治になった頃という。

弘さんは「曾祖父までは塩田で働いていたし、先祖の話は父からよく聞かされた。今、この辺りの的形の名字は私だけ。先祖さんは故郷を大事にしたのかも、しれないね」とどこやかに語った。

**姫路東部の塩田** 姫路市史によると、近世初期、大塩、的形、木場、宇佐崎など各村に塩田があった。簡素な防潮堤を設け、干潮差を利用して塩田に海水を導く「古式入浜」は、一部では鎌倉時代に出現したという。

江戸前期、姫路藩には築城のため石工らが集結しており、巨大な防潮堤の建造を可能にしたとみられている。これにより生産を大規模化、企業化した「入浜塩田」が確立し、赤穂や全国へと広がった。

#### 田淵家文書

[ako-hyg.ed.jp/bunkazai/shitei/shi44.html](http://ako-hyg.ed.jp/bunkazai/shitei/shi44.html)

正保2年（1645年）6月、新たに赤穂53,500石の領主として入封した浅野長直は、前代の池田家の塩業政策を受け継いで積極的な開発奨励政策を推進し、千種川河口東岸の沖合に新規塩田を開発する一方、西岸の既存塩田の整理・統合を推し進めた。このうち前者（尾崎村・新浜村）に形成されたものを東浜、後者（加里屋町・塩屋村以西）を西浜、これらを合わせて赤穂塩田と総称している。浅野家治世50余年の間に、東浜で110町歩余が、西浜でも95町歩余の入浜塩田が造成されたが、赤穂塩田200町歩余の生産力は米に換算して3万～5万石に相当するものであった。

この東浜の開発と並行して、赤穂藩では塩業先進地である大塩・的形地方（姫路藩領）の塩業者の移住を奨励したが、この契機に従って尾崎村に移住したのが市兵衛（川口屋・田淵家の初代当主）であり、寛文13年（1673延宝元年）にはすでに尾崎村の資産家であったことが確認されている。この年（延宝元年）に御崎新浜村に移り、延宝5年（1677年）からは塩問屋を兼営、村政でも元禄10年（1697年）には新浜村年寄役（二代市兵衛の時）、元文5年（1740年）には大年寄格（三代九兵衛の時）へと上昇し、延享5年（1748年）には蔵元役に就任するなど、藩財政の一翼を担うまでに成長した。この頃に田淵姓を名乗ることが許されたようで、多角経営も本格化していき、家業（塩田経営・塩問屋・薪問屋）のほか金融業（大名貸1船手貸）や廻船経営までもに進出しているが、この後の安永～文化（1772～1817年）頃が同家の最盛期であり、東西あわせて106町歩を所有する日本最大の塩田地主であった。